

国際仏教学大学院大学研究紀要  
第 26 号 (令和 4 年)

Journal of the International College  
for Postgraduate Buddhist Studies  
Vol. XXVI, 2022

「機械仕掛けの少女の説話」の仏教化  
— Kumāralāta の Jātaka/Avadāna 集—

幅 田 裕 美



# 「機械仕掛けの少女の説話」の仏教化

## —Kumāralāta の Jātaka/Avadāna 集—

幅田 裕美

### 1. はじめに

トカラ語の解読に成功した Emil Sieg が“Das Märchen von dem Mechaniker und dem Maler in tocharischer Fassung”<sup>1</sup>（機械職人と画家の物語のトカラ語版）として 1920 年に紹介したテキストは、「機械仕掛けの少女の説話」（die Erzählung vom mechanischen Mädchen）<sup>2</sup>としてトカラ語研究者の間で最も良く知られているテキストである。物語の展開の面白さに加えて、卓越した文学的な技巧、登場人物の心理描写の巧みさ、そこに仏教教義が豊かに織り込まれて、読む者を魅了してやまない傑作である。トカラ語文献のなかでも保存状態の非常に良い断片で、物語の全体像をほぼ知ることができ、トカラ語 A の断片集 Tocharische Sprachreste を 1921 年に出版した Sieg と Siegling はこの物語を含む説話の断片に A1 から通し番号を付け、断片集の冒頭を飾った。

こうして印欧語比較言語学者の Sieg とインド学者の Siegling の共同研究によってトカラ語文献の基礎が築かれたが、トカラ語 B の断片集の第一巻が第二次世界大戦後の 1949 年に刊行された時には既に Siegling は故人となっており、第二巻が 1953 年に世に出た際には Sieg も他界していた。この両者の没後は主に言語学の研究が進展したが、インド学仏教学との

---

<sup>1</sup> Sieg [1920].

<sup>2</sup> トカラ語の入門書 Tocharisches Elementarbuch の読本に収録されたテキスト (Krause & Thomas [1960–64], II pp. 19–23) にこの見出しが用いられている。Pinault ([2008], pp. 251–268) も“Histoire du peintre, du mécanicien et de la fille mécanique”のタイトルでトカラ語名文集に含めている。

本格的な共同研究は衰退し、仏教文献であるトカラ語文献が仏教学界において注目される機会は少なかったようである<sup>3</sup>。そのような状況にあつて、印欧語比較言語学者 Olav Hackstein（ミュンヘン大学教授）と筆者は2012年にトカラ語の仏伝資料に関する言語学と仏教学の共同研究を開始した<sup>4</sup>。この共同研究は2018年からの説話文献に関するプロジェクトに引き継がれている<sup>5</sup>。本稿では Hackstein 教授との共同研究の一端を紹介することとしたい。

上記の「機械仕掛けの少女の説話」を含む Šorčuq 出土<sup>6</sup>の写本は Sieg [1921]の A1 から A53 の番号の断片からなり<sup>7</sup>、オリジナルの葉番号が残っている断片から、大部のテキストの写本であったことが知られる。本稿で写本についての紹介を書くにあたって、小さな断片を調べていて、筆者は驚くべき名前が書かれていることに気がついた。Kumāralāta、後代の仏教思想界で経（量）部の祖とみなされているが、その著作が断片的にしか知られていない、北インドの伝説の高僧の名前である<sup>8</sup>。すなわち

<sup>3</sup> 若干の例外として、Bernhard の Udānavarga 研究 (Bernhard [1965–68]) と Ji Xianlin の Maitreyasamitināṭaka 研究 (Ji Xianlin [1998]) が挙げられる。

<sup>4</sup> Deutsche Forschungsgemeinschaft のプロジェクト“Die Legende vom Leben des Buddha in tocharischen Texten: Eine interdisziplinäre Untersuchung zur zentralasiatischen Überlieferung” (仏伝のトカラ語テキスト：中央アジアにおける伝承に関する学際的研究)。プロジェクトの成果は Hackstein & Habata & Bross [2019]で刊行された。

<sup>5</sup> Deutsche Forschungsgemeinschaft のプロジェクト“Jātaka- und Avadāna-Texte in west- und osttocharischer Sprache: Eine interdisziplinäre Untersuchung zur zentralasiatischen Überlieferung” (トカラ語 A 及び B のジャータカ・アヴァダーナ文献：中央アジアにおける伝承に関する学際的研究) および「トカラ語仏教圏におけるジャータカ・アヴァダーナの伝承の学際的研究」(2021–2025 年度科学研究費補助金・基盤研究 (B) 課題番号 21H00474)。

<sup>6</sup> 出土地 Šorčuq の“Stadthöhle” (“Nāgarājahöhle”)については Grünwedel [1912], p. 206, Höhle 9 参照。

<sup>7</sup> 断片 A54 は A1–A53 の写本と葉の大きさや行の書式などが異なり、同一写本に属するかどうかについては疑問が残る。Sieg & Siegling [1921], p. 1, p. 30 参照。

<sup>8</sup> 経量部における Kumāralāta については加藤 [1989], pp. 37–52 参照。『馬鳴菩薩伝』でも傑出した名僧として南の龍樹、東の馬鳴、西の韋羅、北の鳩摩羅羅

断片 A32 裏面の 3 行目に *kumāralāṭem* とあり、次行に *ākluṣ piṭak sūtā(r)*<sup>9</sup>、5 行目に *vaibhāṣi(ka)* と書かれている。*Kumāralāṭa* の *-ta* が反舌音化しているが、「彼らは経蔵に通達した」「毘婆沙師」という断片的な表現が *Kumāralāṭa* あるいは彼の周囲を形容する語句である可能性はきわめて高い。*Jātaka/Avadāna* の説話集とみなされるこの写本に、*Kumāralāṭa* が説話中の人物として登場することは考えられない。この断片のオリジナルの葉番号は 32 であり、断片 A43 に残っているオリジナルの葉番号が 121 であるから、テキストの中途にあたり、おそらく、テキストの章区分に書かれる著者についての記述であろう。*Lüders* が 1926 年に出版した *Bruchstücke der Kalpanāmaṇḍitikā des Kumāralāṭa* でも著者名 *Kumāralāṭa* は章区分のいわゆるコロフォン (*Kapitelunterschrift*) で言及されている<sup>10</sup>。トカラ語 A の断片集 *Tocharische Sprachreste* の出版はこの *Lüders* の *Kalpanāmaṇḍitikā* の出版前であり、*Sieg* と *Siegling* が *Kumāralāṭa* の名前の重要性に気づかなかったのも理解できるが、その後百年余り、この重要な名前が注目されることなく過ぎたことは不思議である<sup>11</sup>。言語学と仏教学の協力が不可欠であることを痛感する。

*Kalpanāmaṇḍitikā* の出版後、このテキストの内容が鳩摩羅什訳の馬鳴作『大莊嚴論經』（『大莊嚴經論』）<sup>12</sup>と一致することから、著者が *Kumāralāṭa* か *Aśvaghōṣa* かという議論がかわされてきた<sup>13</sup>。*Kumāralāṭa* の著書がこの

---

陀を挙げ、*Kumāralāṭa* に関して「鳩摩羅羅陀法師北方之美、若辰星之在衆宿」「鳩摩羅陀處於北方、若月照於夜」と讃えられていたことを伝えている。落合 [2000], p. 270, 第 35–38 行、和訳 p. 294 参照。『馬鳴菩薩伝』の『大正蔵』本が古写経と異なることについては落合 [2000], pp. 619–646 参照。

<sup>9</sup> *Sieg & Siegling* [1921], p. 22 では 4 行目の読みに *sudha* を挙げ、注で“*Oder sūtā(r)* = *skt. sūtra?*”とする。

<sup>10</sup> *Lüders* [1926], pp. 18–20.

<sup>11</sup> トカラ語のデータベース *CEToM* (*A Comprehensive Edition of Tocharian Manuscripts*, <https://www.univie.ac.at/tocharian/>)でこの断片の裏面 3 行目が“(this work [composed by] *Kumāralāṭa*)”(https://www.univie.ac.at/tocharian/?m=a32)と訳されているが、著者問題に関する言及はないようである (2022 年 4 月 2 日閲覧)。

<sup>12</sup> 『大正蔵』第 4 卷 no. 201.

<sup>13</sup> 著者問題の議論については *Hahn* [1983], pp. 309–311 に要約されている。

他には断片的な引用しか伝わっていないことから<sup>14</sup>、コロフォンで著者名を明記する Kalpanāmaṇḍitikā は Kumāralāta の作品とその思想を直接知る貴重なテキストとなる。トカラ語 A1–A53 写本との文体の比較、作品に織り込まれた仏教思想の分析<sup>15</sup>など、今後、詳細な研究が必要である。

## 2. Puṇyavantajātaka の伝承

上記のトカラ語写本 (A1–A53) に含まれる説話のなかでも断片の状態の良い二十五葉 (A1–A25) の部分は、トカラ語研究者のあいだで Puṇyavantajātaka と Bṛhaddyutijātaka として知られている<sup>16</sup>。断片 A1 のオリジナルの葉番号は 65 であり、Puṇyavantajātaka 物語の冒頭は欠けているため、パーリの Jātaka のように冒頭に現在物語があったかどうかは不明であるが、Jātakamālā のように過去世物語から始まるスタイルの可能性も考えられよう。この Jātaka 名はパラレルの Mahāvastu<sup>17</sup>から知られるもので、トカラ語断片には物語名は残っていない。物語の最後には、物語の人物を仏陀の現在の人物と結びつける Jātaka に典型的な段落がみられるので、この物語が Jātaka であることは疑いない。しかし、それで語りが終わるのではなく、物語の名称が挙げられることもなく、物語の主題を要約した偈文が続き、その解説が散文で語られる<sup>18</sup>。この散文では物語の主題「福德」(tochA pñi, skt. puṇya)について、「知恵」(tochA knānmune, skt. jñāna)が「福德」を伴わなければ意味がないことが強調され、これを sambhāra と説明し、この両方の sambhāra (すなわち puṇya と jñāna) の六

<sup>14</sup> 加藤 [1989], pp. 43–46 に Kumāralāta の断片資料が概観されている。

<sup>15</sup> この写本に含まれる Bṛhaddyuti の物語を分析した荻原 [2010]はパラレル文献のなかでも『大毘婆沙論』の表現との一致がみられることを指摘している。

<sup>16</sup> Sieg & Siegling [1921], pp. 3–20. Sieg [1944]にドイツ語訳されている。

<sup>17</sup> Mv (ed. Senart) III pp. 33–41; Mv (ed. Marciniak) III pp. 42–48. この物語はパーリの Jātaka には収録されていないが、漢訳に『生経』の第 24 話「國王五人経」(『大正藏』第 3 卷, no. 154, 87a17–88c27)、『佛説福力太子因縁経』(『大正藏』第 3 卷, no. 173, 428a16–436a26) がある。

<sup>18</sup> Lane [1947]の英訳はこの偈文までで終わっている。

波羅蜜を仏陀が長い無数劫の間、修行したことが説かれる<sup>19</sup>。次の物語との明確な区切りはなく、同じ「福德」を主題として Brhaddiyutijātaka が続く。

Puṇyavantajātaka は五人の王子（Rūpavān, Vīryavān, Śīlpavān Prajñāvān, Puṇyavān）がそれぞれの優越性を競う物語であるが、トカラ語ヴァージョンの構成は Mahāvastu とは大きく異なり、以下のようになっている。

### 1 過去世物語 (A1–A16b5)

#### 1.1 それぞれの王子が自分の優越性を讃える (A1–A14b6)

##### 1.1.1 [Rūpavān] (写本のこの部分は失われている)

##### 1.1.2 Vīryavān (A1a1–A2b1)

###### 1.1.2.1 Sarvārthasiddha 王子の物語 (A1a4–A2a2)

###### 1.1.2.2 太古の人間の物語 (A2a2–a6)

##### 1.1.3 Śīlpavān (A2b1–A4a1)

###### 阿舎から引用された偈文 (A3a2–A4a1)

##### 1.1.4 Prajñāvān (A4a1–A13a5)

###### 1.1.4.1 Krośavafī の物語 (A4a4–A5a2)

###### 1.1.4.2 機械仕掛けの少女の物語 (A5a2–A10a2)

###### 1.1.4.3 Rāma の物語 (A10a2–A11a6)

###### 1.1.4.4 獅子作りの物語 (A11a6–A13a5)

##### 1.1.5 Puṇyavān (A13a6–A14b6)

#### 1.2 五人の王子がそれぞれの優越性を実証する(A14b6–A16b5)

##### 1.2.1 Vīryavān (A15a5–b1)

<sup>19</sup> この sambhāra はトカラ語に訳されず、サンスクリット語のまま仏教用語として扱われている。sambhāra を puṇya と jñāna とするのは Abhidharmakośabhāṣya の説明 sambhāreṇa mahāpuṇyajñānasambhārasamudāgamāt (AKBh 415.2)と一致し、これを修行して仏身を獲得したことも tribhiḥ kāraṇaiḥ sāmyaṃ sarvabuddhānām | sarvapūṇyajñānasambhārasamudāgamataḥ dharmakāyapariniṣpattitaḥ arthacaryayā ca lokasya | (AKBh 415.14–15)と合致する。sambhāra の解釈については Poussin [1923–31] chapitre 7, pp. 79–81 および BHSD s.v. sambhāra “*equipment for (those destined for) enlightenment; consists of two things, puṇya and jñāna*”参照。既に Sieg [1944], p. 21, note 10 が Poussin の仏訳のこの箇所を参照している。

## 1.2.2 Śilpavān (A15b1–b2)

## 1.2.3 Rūpavān (A15b2–b3)

## 1.2.4 Prajñāvān (A15b3–b4)

## 1.2.5 Puṇyavān (A15b4–A16b5)

## 2 登場人物の仏陀時代の人物との結びつけ (A16b5–A17a5)

## 3 福德を讃える要約の偈文 (A17a5–b5)

## 4 仏陀が長い劫の間に福德を積んだこと、sambhāra と kalpa についての解説 (A17b5–A19a5)

パラレル文献は主に Dschi [1943]で詳細に集められているが、「1.1.2.1 Sarvārthasiddha 王子の物語」は『大智度論』<sup>20</sup>、「1.1.2.2 太古の人間の物語」は阿含の「小縁経」<sup>21</sup>、「1.1.4.3 Rāma の物語」は Rāmāyana<sup>22</sup>、「1.1.4.4 獅子作りの物語」は Pañcatantra<sup>23</sup>など、仏教文献に限らず広くインド文学からも取り入れられており、著者の文学的教養の深さが窺われる。また、「1.1.3 Śilpavān」で引用される偈文が阿含の「善生経」(\*Śikhāḷaka-sūtra)に対応することが荻原 [2009]によって指摘されている<sup>24</sup>。Mahāvastu の Puṇyavantajātaka の五人の王子の力くらべの物語と重なるのは、「1.2 五人の王子がそれぞれの優越性を実証する」箇所であるが、この箇所は非常

<sup>20</sup> 『大正蔵』第25巻、no. 1509, 151a15–152a26.

<sup>21</sup> 「小縁経」には『長阿含』第5経「小縁経」（『大正蔵』第1巻、no. 1, 36b28–39a20）、『中阿含』第154経「婆羅婆堂経」（『大正蔵』第1巻、no. 26, 673b4–677a7）、施護訳『佛説白衣金幢二婆羅門縁起経』（『大正蔵』第1巻、no. 10, 216b11–222a14）があり、Dīghanikāya 第27経 Aggañña-suttanta に対応する。

<sup>22</sup> Rāmāyana の説話は中央アジアに種々のテキストが伝承されていたようである。Dschi [1943], pp. 286–287 参照。

<sup>23</sup> この箇所のトカラ語テキストとドイツ語訳を紹介した Sieg [1916]において Pañcatantra で知られている説話であることが既に指摘されている。

<sup>24</sup> 「善生経」には『長阿含』第16経「善生経」（『大正蔵』第1巻、no. 1, 70a19–72c6）、『中阿含』第135経「善生経」（『大正蔵』第1巻、no. 26, 638c6–642a21）、安世高訳『佛説尸迦羅越六方禮経』（『大正蔵』第1巻、no. 16, 250c12–252b2）、支法度訳『佛説善生子経』（『大正蔵』第1巻、no. 17, 252b7–255a8）があり、Dīghanikāya 第31経 Sīṅgālovāda-suttanta に対応する。サンسكريット断片については松田 [1996]および Enomoto [1994], pp. 55–56 参照。



に簡潔に語られ、その前の「1.1 それぞれの王子が自分の優越性を讃える」が他の説話や経典を豊かに織り込んでいるのと対照をなしている。

### 3. 「機械仕掛けの少女の説話」の伝承

王子 Prajñāvan が知恵 (prajñā) の優越性を讃える箇所は、様々な説話からなる最も長い部分であるが、その説話のひとつが「機械仕掛けの少女」の物語である。機械師の作った機械仕掛けの少女を、絵師が本物の少女と思い込んで恥をかき、仕返しに自分が首吊りをした絵を壁に描いて、機械師が今度はこれを本物と思って大騒ぎとなる、という物語の枠組みから成る。Mahāvastu の Punyavantajātika にはこの物語はなく、漢訳の『生経』第24話「國王五人経」では Śilpavān (工巧者) が機械仕掛けの人形 (機關木人) を作る話があるが<sup>25</sup>、トカラ語の物語のように絵師が機械師に騙されるという物語の枠組みとは異なっている<sup>26</sup>。絵師と機械師の物語は、『根本説一切有部毘奈耶藥事』の Anavataptaḡāthā 部分において Śāriputra が śilpa と ṛddhi の能力において Mahāmaudgalyāyana より優れていることに関する5つの過去世の物語の第1話として現われ<sup>27</sup>、『雜譬喻経』第8話にも収録されている<sup>28</sup>。これらのヴァージョンは、面白おかしい説話を簡潔に語るのみで、そこに仏教的な要素はみられない。これに

<sup>25</sup> 『大正蔵』第3巻、no. 154, 87b26–27 および 88a17–b11.

<sup>26</sup> 『佛説福力太子因縁経』(『大正蔵』第3巻、no. 173, 428a16–436a26) には機械仕掛けの人形の物語はない。

<sup>27</sup> 『大正蔵』第24巻、no. 1448, 77a23–b18、サンスクリット語テキストは GM vol. III, part 1, 166.9–168.5、チベット語訳テキストは Hofinger [1954], pp. 38–40、和訳は八尾 [2013], pp. 459 参照。Anavataptaḡāthā 文献については Salomon [2008] に詳しい解説がある。Candrakīrti の Prasannapadā では Vinaya からの引用としてこの物語が言及されている。Vinaye ca, yantrakārikāritā yantrayuvatīḡ sadbhūtayuvatīsūnyā sadbhūtayuvatīrūpeṇa pratibhāsate, tasya ca citrakarasya (ed. L citrakārasya) kāmarāḡspadībhūtā (PsP ed. L 46.5–6; ed. M 214.3–5; cf. MacDonald 2015, II p. 179, note 346); sarve ca moṡadharmāḡaḡ saḡskārās tasmān moṡadharmakatvena te saḡskārā mṛṡā bhavanti, citrakarayantradārikāvāt (PsP 238.2–3). この Candrakīrti の言及については劉暢氏にご指摘をいただいた。

<sup>28</sup> 『大正蔵』第4巻、no. 20, 523c29–524a19.

対して、トカラ語のヴァージョンは登場人物の心の動きを微妙に描写し、そこに仏教の教えを織り込んで、文学作品として完成させたものである。散文と韻文が交互に用いられる、いわゆる *campū* スタイルと呼ばれる *kāvya* の技巧も凝らして表現されている<sup>29</sup>。以下に物語の最初の部分（A5a2–A8b1）を拙訳で紹介したい<sup>30</sup>。韻文の箇所は行頭を字下げして示す。

人が美貌をそなえ良い外見であっても、知恵が彼になければ、描かれた絵であるかのように美しく見えるだけである。彼は恋愛の情を引き起こすことはできるが、有益なことを為すことはできない。

すなわちたとえば、或る時、或る絵師が機械師の家へ客人として来た。それから、その機械師は絵師をあらゆるやり方でもてなして、夜には家の離れに寢床をしいて、ごま油を（持たせた木の）機械の少女を、（寢床の）頭から（離れたところに）置いた。それ（機械の少女）は、彼への敬いを伴うごとく、美しさと恭しさを手につかんで、彼（絵師）に熱心に仕えた。だが、どのようなやり方か。

はにかみがちに少しうつむきながら、彼女は愛らしく見えた。  
おずおずして何も話さず、笑わない。

（熱心に）仕えながら、しかし、愛情をもって腕を差し伸ばした。

彼女は、絵師の全身を熱くした。

それからその絵師は、無知によって、その木の少女を本物の少女であるという思いをいだいて、自ら考えた。「ああ、なんというこの美しさ、ああ、なんという、女らしいはにかみによるこの恥じらい。

<sup>29</sup> *campū* スタイルについては Hahn [1992], p. 4 および Chojnacki [2008], pp. 155–161 参照。

<sup>30</sup> 校訂テキストおよび新たな翻訳、注釈は Hackstein 教授と共同で準備中であり、あくまでも紹介のための暫定的な試訳であることをお断りしておきたい。意味が解明されていない語句もあるが、詳しい解説は共同の論文でまもなく発表する予定である。できるだけ逐語訳するために、日本語として不自然な表現が作品の芸術的な雰囲気を損なってしまうことにお詫びを申し上げたい。

すこぶる喜んでいようには見えないし、  
気高き女は私のことを気にしていないようだが、  
熱心に仕えながら、腕を差し伸ばして、  
（私を）腹部に引き寄せるかのようだ。

胸の上の飾りはほとんど動かないが、高く浮いている。

はにかんでいても、なおさら、私の心を愛によって喜ばせる。

彼女はいったい誰だろう。機械師の妹か、娘か、妻か、召使いか。それとも、ちょうど私のように、彼のところに客として来たのか。しかし、客が他の客をもてなすように言いつけられることはありえないだろう。いずれにせよ、機械師は私に対してすこぶる信用を示して、このように美しいこの少女をひとりで私と共にさせたのだ。」そこで絵師は、愛に悩まされて、彼女を（観察し）、のびをして、手を前へ伸ばすしぐさをした。このように少女を見ながら、自ら考えた。

「いや、だめだ、愛の神が、その顔で私を狂わすために、姿を現しに来たのだ。

どうして彼女が、私に仕えるために、姿を現したままでいようか。心からの憧れの情を、どうして彼女に対して寄せないでいられようか。

このたおやかな少女が（私に）熱心に仕えている（という）夢が、（どうしたら）消えないのか。」

いまや彼（絵師）は考えた。「十種の女に愛を起こすのは、賢い者たちには許されないような大きな危険であるとみなされている。すなわち、王の女、父の妻、將軍の妻、親戚の妻、師匠の妻、大げさに媚ぶる女、勝つことを考えてばかりいる女、多くの（男が）行く女、とりわけ、美しい女、（これらの女には）、命を大切にする者たちにとっては、近づくべきではない、と人は言う。これによると、彼女は私の親戚（機械師）に属する女で、しかも、とりわけ、美しく見える（女）であるのだから、（彼女に向かう）愛が知られるのはありえない。」いまや彼（絵師）は考えた。「しかし、いったい誰が、このように美しい（少女）を、このような場所で、このような時間に、自らを控えるこ

とができようか。どうして、私が彼女に、愛をもって語るべきでないのか。いや、それとも、その前に手をつかんでみてはどうだろう。」そこで絵師は愛をもって、機械の少女の手をつかんだところ、たちどころにその機械は、布切れと鎖（紐）と棒がばらばらに崩れ落ち、そして少女はいなくなった。それを見て、絵師は、驚いたように寝床から飛び起きて、しげしげと観察してから言った。「ああ、なんと、機械師の親方に欺かれたのだ。ああ、なんとという愛欲の威力！ああ、なんとという無知の恐怖！人間が布切れに激しく愛を抱くとは！だがしかし、賢い者たちの真の言葉（があり）、彼らは次のように説く。『自己はない。人間に自己という想いが作られたのだ。』いや実に自己はないのだ。

布切れと鎖（紐）と棒から組み立てられた、この私の想いだったもの、

それこそが、骨と肉と腱から組み立てられた、人間の自己という想いなのだ。

身体の部分をばらばらに分けると、ここには自己と名づくものは存しない。

私の愛が布切れにおいてあったように、まったくもって身体においても同様である。ふん、盲目的な煩惱め。

しかし、この事は、機械師の親方によって、彼自身の技が巧みであることが、私に示されたのだ。どうして今度は私が、私自身の技を彼に示さずにいられようか。」そこで、絵師は早速、絵筆と絵の具をとって、その夜のうちに、首に縄をかけて釘からぶら下がって死んだ自分の姿を、壁に描いた。だが、どのようにか？

（以下続く）

以上のトカラ語ヴァージョンが写本の四葉にまたがる長さであるのに比して、この部分に対応する根本説一切有部律のBhaisajyavastuでは簡潔

に物語の展開を語るのみで<sup>31</sup>、上記のような細やかな心理描写も仏教教理的な思索もみられない。絵師の思索にみられる無我の教えについては、たとえば『俱舎論』の第一章「界品」に「我がないのに、どうして内なるとか外なるとかいうことがあるのか。我執の依りどころであるから心が仮に「我」と言われるのである」<sup>32</sup>が参照されるが、トカラ語の「自己はない。人間に自己という想いが作られたのだ。」と全く一致する表現ではない。『俱舎論』のこの箇所に関してSaṃghabhadraは「経主」の説とするが<sup>33</sup>、Yogācārabhūmiのpratyātmikān saṃskārān ayoniśa ātmato manasikurvato yad ajñānam<sup>34</sup>という表現の方が、無知を嘆くトカラ語の内容により近いように思われる。今後、詳しく検討する必要がある。

文学的な卓越性と仏教教理の知識の深さは、「北方の美」<sup>35</sup>と讃えられた名僧Kumāralātaにふさわしいと言えよう。『俱舎論』はKumāralātaをBhadantaと呼んで彼の説を引用しており<sup>36</sup>、彼の思想を知っていたと考えられる。Kumāralātaの哲学書がほとんど失われて伝わっていないなかで、彼の文学作品のみが残っていることを、Lüdersは「古典期以前の輝かしい

<sup>31</sup> [bhūtapūrvaṃ madhya]deśe anyataraś citrakarācāryo 'bhūt | sa [dhanārthāya] karaṇīyena madhyadeśād yavanaviśayaṃ gataḥ | sa tatra yantrācāryasya niveśane 'vafūrṇaḥ | tena tasya pa[ricaryārthāya yantraputrikā kṛtvā praveśitā | sā tasya pādau dhāvitvā sthitā | atha sa tasyā gamanasamaye kathayati | sā] tūṣṇīm avasthitā | sa saṃlakṣayati | nūnaṃ mamaiva paricārikā preṣitā | sa tām hastam grhītvā ākraṣṭum ārabdhāḥ | yāvac chrīkhalikā puñji[bhūtā | sa lajjitaḥ saṃlakṣayati | aham anena lajjāpitaḥ | aham apy enaṃ sarājaparijanaṃ lajjāpa]yiśyāmīti | tena dvārābhimukham ātmapratibimbakam udbandhakaṃ likhitam | kavāṭasandhau ca nilīyāvasthitaḥ | (GM vol. III, part 1, 166.14–167.2).

<sup>32</sup> 和訳は櫻部 [1969], p. 211 による。ātmany asati katham ādhyātmikam bāhyaṃ vā | ahaṃkārasanniśrayatvāc cittam ātmety upacaryate (AKBh 27.6)、玄奘訳は「我體既無内外何有。我執依止故。假説心爲我」『阿毘達磨俱舎論』(『大正藏』第29卷 no. 1558, 9c18–19)。既に Sieg [1944], p. 10, note 11 が Poussin [1923–31] chapitre 1, p. 74 のこの箇所を参照している。

<sup>33</sup> 『阿毘達磨順正理論』(『大正藏』第29卷 no. 1562, 360b21–c4)、Kritzer [2005], p. 28 参照。

<sup>34</sup> YBh 204.11、テキストは Kritzer [2005], p. 29 による。

<sup>35</sup> 前掲注 8 参照。

<sup>36</sup> AKBh 20.1–3。加藤 [1989], p. 47 参照。

詩人のひとりを知ることを彼は可能にしたのだから、我々はこの偶然について嘆こうとは思わない」<sup>37</sup>と記したが、筆者も全く同じ感慨を抱くものであり、珠玉の作品と彼の名前が残されていることを奇特に思う。

## 略号

AKBh: Pradhan, P.: *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.

BHSD: Franklin Edgerton: *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*. Vol. II: Dictionary. New Haven 1953.

GM: *Gilgit Manuscripts*, ed. Nalinaksha Dutt, Srinagar, 1939–59.

Mv (ed. Senart): Émile Senart: *Le Mahāvastu. Texte Sanscrit publié pour la première fois et accompagné d'introductions et d'un commentaire*. Paris: À L'Imprimerie Nationale, 1882–1897.

Mv (ed. Marciniak): Katarzyna Marciniak: *The Mahāvastu. A New Edition*. (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica XIV,1–2). Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University), vol III 2019, vol. II 2020.

PsP (ed. L): Louis de la Vallée Poussin: *Mūlamadhyamakārikās (Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti*, St.-Pétersbourg 1903–1913.

PsP (ed. M): Anne MacDonald: *In Clear Words. The Prasannapadā, Chapter One*, Wien 2015.

tochA: tocharisch A

YBh: Vidhushekhara Bhattacharya: *The Yogācārabhūmi of Ācārya Asanga. The Sanskrit Text compared with the Tibetan Version*. Part I. Calcutta: University of Calcutta, 1957.

<sup>37</sup> “Daß dann das einzige Werk, das uns von Kumāralāta erhalten ist, gerade eine Dichtung ist, während die philosophischen Schriften, auf die der Sautrāntika-Meister selbst vielleicht größeres Gewicht legte, verloren gingen, das ist ein Zufall, über den wir uns aber nicht beklagen wollen, da er es uns ermöglicht hat, einen der glänzendsten indischen Dichter der vorklassischen Zeit kennen zu lernen.” Lüders [1926], p. 25.

## 参考文献

- Bernhard, Franz [1965–68]: *Udānavarga*. (Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen. Philologisch-historische Klasse. Dritte Folge 54. Sanskrittexte aus den Turfanfunden X). Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, Band I, 1965; Band II, 1968.
- Chojnacki, Christine [2008]: *Kuvalayamālā. Roman jaina de 779, composé par Uddyotanasūri*. vol. I: Étude. (Indica et Tibetica 50,1). Marburg: Indica et Tibetica Verlag.
- Dschi, Hiän-lin [Ji, Xianlin] [1943]: Parallelversionen zur tocharischen Rezension des Punyavanta-Jātaka. in: *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 97, pp. 284–324.
- Enomoto, Fumio [1994]: *A Comprehensive Study of the Chinese Saṃyuktāgama. Indic Texts Corresponding to the Chinese Saṃyuktāgama as Found in the Sarvāstivāda-Mūlasarvāstivāda Literature*. Part 1: \*Saṃgītipāṭa. Kyōto: Kacho Junior College.
- Grünwedel, Albert [1912]: *Altbuddhistische Kultstätten in Chinesisch-Turkistan. Bericht über archäologische Arbeiten von 1906 bis 1907 bei Kuča, Qarašahr und in der Oase Turfan*. Berlin: Reimer.
- Hackstein, Olav & Hiromi Habata & Christoph Bross [2019]: *Tocharische Texte zur Buddhalegende*. (Münchener Studien zur Sprachwissenschaft, Beiheft 27). Dettelbach: Verlag J. H. Röll.
- Hahn, Michael [1983]: Kumāralātas Kalpanāmaṇḍitikā Dṛṣṭāntapañkti. Nr. 1 Die Vorzüglichkeit des Buddha. in: *Zentralasiatische Studien* 16.1982, pp. 309–336.
- Hahn, Michael [1992]: *Haribhaṭṭa and Gopadatta. Two authors in the succession of Āryasūtra on the rediscovery of parts of their Jātakamālās*. Second edition thoroughly revised and enlarged. (Studia Philologica Buddhica. Occasional Paper Series 1). Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.
- Hofinger, Marcel [1954]: *Le congrès du Lac Anavatapta (Vies de saints bouddhiques): Extrait du Vinaya des Mūlasarvāstivādin Bhaiṣajyavastu*. I:

- Légendes des Anciens (Sthavirāvadāna). (Bibliothèque du Muséon 34).  
Louvain: Institut Orientaliste.
- Ji Xianlin [1998]: *Fragments of the Tocharian A Maitreyasamiti-Nāṭaka of the Xinjiang Museum, China*. Transliterated, translated and annotated by Ji Xianlin in collaboration with Werner Winter, Georges-Jean Pinault. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 加藤純章 [1989]: 『経量部の研究』東京（春秋社）。
- Krause, Wolfgang & Werner Thomas [1960–64]: *Tocharisches Elementarbuch*. Band I: Grammatik; Band II: Texte und Glossar. Heidelberg: Carl Winter.
- Kritzer, Robert [2005]: *Vasubandhu and the Yogācārabhūmi. Yogācāra Elements in the Abhidharmakośabhāṣya*. (Studia Philologica Buddhica, Monograph Series XVIII). Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies of the International College for Postgraduate Buddhist Studies.
- Lane, George S. [1947]: The Tocharian Puṇyavantajātaka: Text and Translation. in: *Journal of the American Oriental Society* 67, pp. 33–53.
- Lüders, Heinrich [1926]: *Bruchstücke der Kalpanāmaṇḍitikā des Kumāralāta*. (Kleinere Sanskrit-Texte II). Leipzig: Deutsche Morgenländische Gesellschaft.
- MacDonald, Anne [2015]: *In Clear Words. The Prasannapadā, Chapter One*. vol. I: Introduction, Manuscript Description, Sanskrit Text; vol. II: Annotated Translation, Tibetan Text. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- 松田和信 [1996]: 「梵文『中阿含』のカトマンドゥ断簡」『印度學佛教學研究』44, pp. 868(113)–862(119).
- 落合俊典 [2000]: 「馬鳴菩薩傳」二種の『馬鳴菩薩傳』—その成立と流傳』『七寺古逸經典研究叢書』第5巻、pp. 265–295, pp. 619–646.
- 荻原裕敏 [2009]: 「トカラ語 A《Puṇyavanta-Jātaka》に於ける阿含經典の引用について」『東京大学言語学論集』28, pp. 133–171.
- 荻原裕敏 [2010]: 「トカラ語 A《Bṛhaddiyuti-Jātaka》の部派帰属について」『東京大学言語学論集』30, pp. 169–185.



- Pinault, Georges-Jean [2008]: *Chrestomathie Tokharienne. Textes et Grammaire*. Leuven/Paris: Peeters.
- Poussin, Louis de La Vallée [1923–1931]: *L'Abhidharmakośa de Vasubandhu. Traduction et Annotations*. tome I–VI. Paris: Geuthner (reprint Bruxelles 1971).
- 櫻部建 [1969]: 『俱舎論の研究 界・根品』京都（法蔵館）。
- Salomon, Richard [2008]: *Two Gāndhārī Manuscripts of the Songs of Lake Anavatapta (Anavatapta-gāthā). British Library Kharoṣṭhī Fragment 1 and Senior Scroll 14. with contributions by Andrew Glass*. (Gandhāran Buddhist Texts 5). Seattle: University of Washington Press.
- Sieg, Emil [1916]: Die Geschichte von den Löwenmachern in tocharischer Version. in: *Aufsätze zur Kultur- und Sprachgeschichte vornehmlich des Orients: Ernst Kuhn zum 70. Geburtstage am 7. Februar 1916; gewidmet von Freunden und Schülern*. Breslau: Marcus, pp. 147–151.
- Sieg, Emil [1920]: Das Märchen von dem Mechaniker und dem Maler in tocharischer Fassung. in: *Festschrift für Friedrich Hirth (Ostasiatische Zeitschrift 8. 1919/20)*. Berlin, pp. 362–369.
- Sieg, Emil [1944]: *Übersetzungen aus dem Tocharischen I*. (Abhandlungen der Preußischen Akademie der Wissenschaften, Jahrgang 1943. Phil.-hist. Klasse, Nr. 16). Berlin: Verlag der Akademie der Wissenschaften.
- Sieg E. & W. Siegling [1921]: *Tocharische Sprachreste*. I. Band: Die Texte. A. Transcription. Berlin: Vereinigung wissenschaftlicher Verleger.
- 八尾史 [2013]: 『根本説一切有部律薬事』東京（連合出版）。

<キーワード>

トカラ語、Kumāralāta、Jātaka/Avadāna

(2021–2025 年度 科学研究費補助金・基盤研究 (B) 「トカラ語仏教圏におけるジャータカ・アヴァダーナの伝承の学際的研究」の研究成果の一部)

## Summary

# The Buddhification of the “Mechanical Girl” Tale in a Jātaka/Avādāna Collection in Tocharian A: Possible Clues for Attributing Its Authorship to Kumāralāta

Hiromi HABATA

“The mechanical girl” tale transmitted in Tocharian A is one of the best known texts among Tocharian scholars. The text is a highly elaborated literary work written in the *campū* style (alternating verse and prose). It gives a brilliant description of the inner life of the characters while incorporating Buddhist teachings.

One fascinating result yielded by my study of the manuscript fragments in which the story appears was the name “Kumāralāta”. It is found in a small fragment to which no one has paid special attention so far. The name is further qualified as “learned in the *sūtrapiṭaka*” and “*vaibhāṣika*”. The fragmentary manuscript discovered in Šorčuq consists of Jātaka/Avadāna stories from a relatively large text. This makes it possible to rule out that “Kumāralāta” is a character name in one of the stories. The most likely interpretation is that Kumāralāta, the famous poet and earliest known philosopher of the Sautrāntika tradition, is the author of this Jātaka/Avadāna collection.

A parallel of “the mechanical girl” tale is found in the *Anavatapta* section of the *Bhaiṣajyavastu* of the Mūlasarvāstivādins. This rendition, however, sketches out only the frame of the funny story played by a painter and a mechanic without the elaborations we see in the Tocharian version. The author of the Tocharian version shows a profound knowledge of the Buddhist philosophy incorporating the *anātman* doctrine in the painter’s

account. Furthermore, the treatment of this doctrine agrees with the description found in the *Abhidharmakośabhāṣya* (a treatise largely reflecting Sautrāntika views) and the *Yogācārabhūmi*. Such details alongside the skillful handling of the literary techniques strongly suggest that the author of the Jātaka/Avadāna collection is Kumāralāta.

*Professor,  
International College  
for Postgraduate Buddhist Studies*